六郷山研究の成果と課題

櫻井成昭

はじめに

国東半島に点在する天台宗寺院群を、「六郷山」あるいは「六郷満山」(以下では、六郷山という呼称で統一する)と総称する。この六郷山は、養老二年(七一一)に仁聞(人聞と記される場合もあるが、以下では特に文字の違いを言及する場合を除いては仁聞という記述で統一したい)が開いたという伝承を持つ。本稿は、こうした六郷山に関するこれまでの研究の成果と残された課題を歴史学の立場からまとめたものである。

さて、本論に入る前に、六郷山に関する史料[1]の性格について簡単に触れておくこととしたい。六郷山に関わる史料は、五つのグループに分けることができる。

一つは、縁起類である。年紀上、最古とされるものは「人聞菩薩朝記」(石清水文書、『大日本古文書　石清水文書二』収載)であり、仁平二年(一一五二)頃のものといわれている。この他に、中世に成立したものとしては、正和二年(一三一三)に宇佐弥勒寺の僧神叶によって編集された『八幡宇佐宮御託宣集』(以下、『託宣集』と略する。一九九〇年に現代思潮社から公刊されている。)がある。さらに、近世以後のものとしては、「仁聞大菩薩旧記」[2](両子寺蔵)が挙げられる。もちろん、これら縁起類の記述は、そのまま史実として採用することはできず、一定の史料批判を必要とするものである。

二つ目としては、近世の記録類がある。天保八年(一八四四)成立の伊藤常足『太宰管内志』(国書刊行会から一九七二年に

公刊。）がまず挙げられる。他に、寛保二年（一七四二）成立の『豊鐘善鳴録』等がある。

三つ目には、六郷山の構成を知ることのできる目録類とも呼ぶべきもので、「仁安三年六郷山二十八本寺目録」（以下、「仁安目録」と呼ぶ）、安貞二年（一二二八）の年紀を有し、六郷山の各寺院で執行された法会を書上げた「六郷山諸勤行并諸堂役祭目録写」（以下、「安貞目録」と呼ぶ）、建武四年（一三三六）の年紀を持ち、六郷山の各寺院について所領の押領者を記した「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」（以下、「建武注文」と呼ぶ）等である。[3] このうち、「仁安目録」は『太宰管内志』に収載されたもので、原典は不詳である。この「仁安目録」以外は、一次史料たる古文書に分類されるものであるが、このように特化したのは、従来の六郷山研究で基礎史料とされ、利用されてきたことに拠る。

そして四つ目が、古文書類である。ここでは、余瀬文書[4]が質量ともに最もまとまった文書群である。この他には、屋山長安寺（豊後高田市）に関連する道脇寺文書[5]等も挙げられるが、余瀬文書も夷岩屋（現在の西国東郡香々地町に所在）ならびにその末坊であった大力坊に関わる文書であり、六郷山全体を俯瞰できる古文書類は決して多くない。

五つ目が、いわゆる金石文である。例えば、長安寺所蔵の木造太郎天像の胎内銘や岩戸寺国東塔の銘文をはじめ、仏像・石造物、経筒の銘文がこれにあたる。

このような六郷山に関わる諸史料の性格をふまえ、以下では六郷山の研究史について、見ていくことにしよう。

一　六郷山研究史

これまでの六郷山研究は、大きく分けると四期に分けられる。第一期は、戦前から一九四〇年代まで、第二期は一九五〇年代から一九六〇年代、そして第三期は一九七〇年代から八〇年代まで、そして第四期が一九九〇年から現在までとなる。

（一）　第一期

この時期は、戦前を中心に県内各地で郡誌・村誌が刊行された時期でもある。例えば、六郷山の所在する国東半島域を見ても、『西国東郡誌』や『三重郷土誌』などの郡村誌が刊行されているが、これらは「〜誌」という書名からも窺えるように地誌的な要素が強いものであり、六郷山の歴史を正面から取り上げられることは少なかった。その中で、河野清實氏の筆になる『豊後国東半島史』（以下、『半島史』と略する）は注目される。本書は、一九二八年に上巻が、四年後の三二年に下巻が刊行されたもので、年譜の他に、史伝、史談、人物伝等から成っている。[6] このうち、史伝の項の冒頭にある「国東半島史概説」では、平安時代を「六郷満山時代」と称し、史談の項においては六郷山の歴史についての叙述がなされている。

これらでは、何故に六郷山の各寺院が成立し発展したのかという点に関心が向けられ、六郷山の成立・発展は宇佐宮の直接・間接の関係を有し、それゆえに八幡神の仏格である仁聞を開基としたと述べられている。そして、河野氏は六郷山の歴史には二つの見方があるとされた。つまり、一つは、宇佐宮の宮司や供僧が寺院を営み、これを「八幡宮威霊の延長」の場とし、さらに寺院である以上、形式的に比叡山の支配を受けたとする見方。もう一つは比叡山が国東の地に寺院を建てたが、この一帯が宇佐宮領であるため、「八幡宮の威霊」を寺院の中に受け入れ、宇佐宮の宮司や供僧から物資等の供給を受けたとする見方である。こうした氏の見方については種々問題もあろうが、六郷山の歴史において、宇佐宮とともに比叡山の存在に留意されたことは注目されよう。ただし、本書の叙述は縁起類や目録類を中心に記され、諸資料に拠る具体的な論証は少く、概説に留まるものといえるが、右で触れたように、たとえ見通しであっても、六郷山の歴史を正面から取り上げたことの意義は改めて注目されるのである。

（2）　第二期

第二期の六郷山研究は、主として中野幡能氏によって進められた。八幡信仰の研究者として知られる氏は、六郷山の研究も

行い、「六郷満山の史的研究」を『豊日史学』および『大分県地方史』に発表されている。そして、一九六六年には『六郷満山の史的研究』（藤井書店）を、さらに翌六七年には『八幡信仰史の研究』（吉川弘文館）に「六郷山の開発と推移」という章[7]を設け、改めて従前の論考をまとめられている。いわば、『八幡信仰史の研究』は中野氏の六郷山研究を総括したもので、ここに氏によって主導された第二期の到達点が示されていると位置付けられよう。

この『八幡信仰史の研究』に示された中野氏の論点は多岐にわたっており、容易にまとめることは難しいが、あえて言うならば氏の研究は、奈良時代から平安時代の六郷山に重点を置いたものであった。すなわち、氏は六郷山の開基である仁聞を八幡三神の一つである比咩神の法名・異称と見なし、『託宣集』に法蓮・覚満・能行・躰能が仁聞の旧跡を修行したとあることから、仁聞を奉ずる巫僧集団の中心にあったのは、四人のうち『続日本紀』にも名が記された法蓮とされた。そして、比咩神は宇佐氏の奉ずる神であるという、八幡研究における氏の見解を援用され、「西別当書上帖」などの史料にみられる、宝亀三年（七八八）に覚満の三世神円が来縄郷払田（現在の豊後高田市払田）に移ったこと、また同じ宝亀三年に躰能の三世の孫が、智恩寺に移り六郷山惣堂達職となったことは、宝亀四年に大神氏が再び宇佐宮に復帰したことに伴い、宇佐氏が比咩神を奉じて、半島に寺院建立を行い、その中心地域は来縄地区（現在の豊後高田市）であったと論じられた。

さらに、氏は本山・中山・末山という三つのグループから成る六郷山の各寺院の本尊に注目され、「安貞目録」に記された本尊を見ると、本山では本尊を薬師如来とするものと観音であるのが同数、中山は観音が多く、末山は薬師・観音が同数で、弥勒や文殊が見られるが、このうち薬師は宇佐弥勒寺の本尊であること等から、本山に属する寺院と宇佐宮とは、古いつながりであるとされた。そして、このような六郷山の寺院のほとんどが、宇佐宮と弥勒寺の荘園の中にあり、その所領は宇佐宮大宮司や弥勒寺別当、私人等の「施入寄免」によって支えられ、六郷山の寺院に伝えられた仏像も平安時代中期のものが多いことを勘案すると、国東半島における宇佐宮と弥勒寺の荘園成立期、すなわち一〇～一一世紀頃に、「六郷山の教団化」が図られたと考えられたのである。この他にも、中野氏は六郷山の寺院のほとんどに所在する六所権現の問題、鎌倉時代の六郷山の

法会等、様々な問題を取り上げられており、こうした氏の研究は、六郷山の歴史を具体的に初めて体系立てた研究であり、多岐にわたる論点を提示したことは、六郷山研究史においては大きな画期となるものであった。特に、氏の論考ではその半分近くが、奈良時代から平安時代にかけての六郷山の叙述にあてられており、このことは氏の主たる関心が六郷山の成立と展開の解明に向いていたことを示しているであろう。

ところで、このような中野氏の研究は、前述したように仁聞は比咩神の異称であり、これは宇佐氏によって祀られたとする見解を基礎に置いたものといえる。それゆえに、六郷山の成立を宇佐氏による寺院建立をその始源と見なし、あるいは鎌倉時代に見られる「異国降伏祈禱」も、比咩神すなわち仁聞が守護神という性格を有していたことに拠るものと位置付けられたのである。こうした中野氏の論は氏自身の八幡研究に依拠したものであり、これは前で提示した河野清實氏の「二つの見方」のうち、六郷山の歴史にとって宇佐宮の果した役割の解明に重点を置いたものであった。

しかし、中野氏の研究については、いくつかの問題もある。例えば、氏の研究の基本をなす仁聞＝比咩神という見解については、『託宣集』に仁聞は八幡神の応化と記されており、こうした中世段階の認識との関係を明確にされていないことがまず挙げられよう。さらに、それ以上に留意される点は、『託宣集』や「西別当書上帖」、「長安寺過去帖」等の後世の縁起類や記録類を史料批判のないまま利用されていることである。例えば、六郷山別当職については、『託宣集』に見られる覚満が初代別当とする記載をひき、惣堂達職の成立等についても後代の記録である「惣堂達書上帖」をもとにされている。いわば、氏が叙述した六郷山の歴史は、『託宣集』などの縁起類・記録類によって骨格がつくられ、それを古文書類によって肉付けされたものであった。確かに、氏が利用された『託宣集』は六国史なども引用され、史実を伝える部分もあるが、基本的には充分な史料批判を必要とするものであるし、「惣堂達書上帖」等も後世の記録であり、そこに記された記載は決して史実を語るものとはいえない。それゆえ、これまで紹介してきた中野氏の論は、確かに六郷山の歴史像を体系的に提示したものではあったが、個々の論点についてはなお再検討を要するものといえよう。

（3）第三期

この時期の特徴としては、まず国東半島において諸々の機関・団体による調査が実施されたことを挙げることができよう。既述したように、第一期には、国東塔の調査や富貴寺などの指定文化財についての調査が実施されている[8]し、第二期には『大分県史料』編纂に伴う史料調査が行われた。また、和歌森太郎を中心とする民俗調査[9]が一九五八・五九年に、文化庁による美術工芸品の調査が一九六八年も実際されているが、いわば指定・未指定を含めた文化財の悉皆的調査という視点での調査[10]が本格化したのは、この時期であった。

また、こうした調査の実施と関連して、六郷山に関する様々な史料が調査紹介されたことも、この時期の特徴である。例えば、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（以下、「歴民」と略する）の豊後高田市都甲地区での調査では、従来その全体は紹介されていなかった「六郷山年代記」（長安寺蔵）が写真とともに全文が翻刻され[11]、歴民の『研究紀要　Ⅵ』（一九八九年）では、都甲地区の調査で新たに発見された道脇寺文書と島原松平文庫所蔵の「自坂東御教書之写」の紹介も行われた。前者は鎌倉時代の屋山長安寺の在地支配の在り方等を示すものであり、後者は鎌倉時代の六郷山と幕府あるいは在地勢力との関係を解明する上で重要な文書といえ、これらが公開されたことは六郷山研究にとって大きな出来事であった。

その一方で、六郷山の基礎史料である目録類の史料批判も行われた。まず、「安貞の目録」が新川登亀夫氏によって検討され、この目録は複数の文書が書写の段階で一つにまとめられたことが明らかにされた[12]。さらに、「建武の注文」も海老澤衷氏によって検討され、この史料は六郷山は武士や宇佐宮大宮司による押領の実態を書き上げたものであったが、この史料では先行する「安貞の目録」よりも六郷山とされる寺院数が増加しており、かかる事象の解釈として、鎌倉時代後半には六郷山が周辺を押領し、結果寺院が増加したのではないかという視点が提起された[13]。そして、これまで平安時代の六郷山の構成を示した史料として扱われてきた「仁安目録」について、一次史料の記述などをふまえ、検討を加えたのが小泊立矢氏であった。

「仁安目録」に関しては、既に後藤宗俊氏が文化庁での広域遺跡保存会での報告で、この史料は『大宰管内志』にのみ引用されたものであり、山号・寺号で統一された記述から、近世の史料ではないかという興味深い指摘をされているが[14]、氏の報告は遺跡保存に関わるものであるため、「仁安目録」の史料批判について具体的な論証はなされなかった。

小泊氏が、『大分県史　中世篇一』に発表された論考[15]は、次のようにまとめることができる。

①この目録は、山号寺号で統一した記載となっているが、余瀬文書などの六郷山に関わる一次史料などでは、古代末から中世の六郷山は、基本的に「～岩屋」、「～山」である。

②こうした六郷山において、山号寺号による記載が見られるのは、一六世紀半ば以後である。

③それゆえ、この目録は一六世紀半ば以後の作になることが推察される。

④ただし、その作成時期については、今後の多面的な検討に委ねられるところが多い。

つまり、従来「仁安目録」に関しては、そこに記された年紀を大前提として受容し、平安時代の六郷山に関わる記録として扱われてきたが、実際には一六世紀以前の年紀を持つ目録類では最も新しいものであることが明らかとなったのである。

このように見てくると、第三期は諸々の調査によって六郷山の歴史解明に関わる諸資料の蓄積が行われる一方で、小泊氏の研究や海老澤氏の研究等のように、従来六郷山研究の基本とされた史料およびその解釈をめぐって再検討が行われた時期といえる。ただし、中野氏の六郷山像に代わるような新たなそれは出されておらず、これは次の段階に持ち越されることとなった。なお、この段階では六郷山の各寺院自体の伽藍や立地に関する調査はあまり行われず、寺院の伽藍や立地などのハード面の調査が課題として残された。

（4）第四期

第四期は、まず六郷山を考古学の側から取り上げた調査が開始されたことが特徴として挙げられる。歴民による「智恩寺調

査」そして「六郷山寺院遺構確認調査」（以下、「六郷山調査」と略する）である。

智恩寺調査は、諸記録に六郷山のうち本山本寺とされた智恩寺（豊後高田市）の境内一帯の発掘調査であり、この調査によって、智恩寺の寺院としての上限は九世紀に求められ、中野氏が智恩寺をはじめとする本山本寺は、宇佐宮の影響下で奈良時代に成立し、智恩寺を『託宣集』に見える躰能が建立した「六郷山」の地とする見解に対して、考古学的見地からは証明しがたいことが明らかとなった。[16] この智恩寺の調査に続いて、実施されたのが六郷山調査である。現存する寺院あるいは廃寺となった寺院を含めて、現状の寺院遺構を平板測量によって図化することを目的としたこの調査は、六郷山とされる寺院全体についてその場所・伽藍配置等を確認し資料化したという点で、寺院自体に関する情報の資料の蓄積という意義を持つものであった。[17]

こうした新たな調査の実施あるいは前段階で行われた基礎史料の蓄積等をふまえ、この時期には飯沼賢司氏によって新たな六郷山像が提示された。飯沼氏による新たな六郷山像の提示は、一九九三年に発表された「文書から見た六郷山の様相―六郷山の成立―」（『六郷山寺院遺構確認調査報告書1』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）あるいは『豊後国等都甲荘の調査』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九三年）にはじまり、以後『豊後高田市史特論編　くにさきの世界』（一九九六年）や『豊後高田市史』（一九九八年）等の論考を通して体系立てられている。[18]

これらの諸論考に見える飯沼氏の見解は、次のようにまとめられる。

① 『六郷山年代記』では、永久元年（一一一三）に天台宗無動寺の末寺となり、保安元年（一一二〇）に延暦寺に寄進されたと記されている。実際、経筒などの銘文に「六郷山」の名称が登場するのは、一二世紀になってからのことである。

② ところで、『託宣集』には覚満や躰能が国東六郷に寺を建てたとあるが、豊後高田市のカワラガマ遺跡からは九世紀段階の　弥勒寺の瓦が出土しており、九世紀段階に弥勒寺の僧侶の活動が国東六郷の山に到っていたことが窺え、智恩寺はそうした　宇佐と国東をつなぐ結節点の役割を有するものといえる。

③ 一方で『託宣集』に見られる斉衡二年（八五四）に能行が国東の峰巡行の道を授かったという記載は、このような弥勒寺

僧の活動が半島全体に展開の始期を示すものといえる。

④　一一世紀末には、六郷の岩屋や寺は、里の水田を支配する各郷の郷司等の援助をうけ寺院として活動を始める。こうした山岳寺院成立の契機として、北部九州への天台宗の本格的な流入が挙げられる。弥勒寺も天台宗の影響下に入り、加えて北部九州では天台宗の聖典でもある法華経の埋納行為である経塚造営も盛んに行われ、これは国東でも見ることができる。つまり、国東でもこうした埋経活動を通じて、天台僧による寺院も建立も進んだと見られる。

⑤　こうした動きをうけて、一二世紀に六郷山は比叡山へ寄進されたが、これは弥勒寺の行場として六郷山が自立したことを意味し、寄進後さらに天台僧やそれに組織された地元の僧侶が、在地の有力者の援助をうけ、寺院の建立が進んだ。

⑥　六郷山は本山・中山・末山の三つのグループから成るが、これは宇佐に近い本山から整備が進んだと見られる。ただ、一二世紀段階では末山はなお一山として独立していなかったと考えられ、六郷山の支配は基本的に満山大衆による合議制であり、屋山が「惣山」として中心寺院となった。

⑦　しかし、一二世紀後半に緒方維栄の乱入で、屋山は焼かれ退転した。これをうけて、一三世紀には大衆による運営体制ではなく、六郷山を統括する執行職を中心に、三山の各山ごとに権別当が置かれるという、いわばタテ支配の体制が生まれた。

⑧　そして、安貞年間には六郷山は関東祈祷所となった。これは当時の比叡山が九条兼実の弟慈円であり、宇佐八幡宮・弥勒寺が本家と仰ぐ近衛家とこの九条家は対立していたことから、六郷山から弥勒寺や宇佐宮の影響を排除するため、九条家と密接な関係にあった幕府に六郷山を結び付けたと見られる。ここに六郷山は宇佐宮・弥勒寺から自立することとなった。

⑨　中世後半の六郷山は、執行職を吉弘氏が有し、武士によって実質的に支配がなされた。また、応永二五年（一四一八）の「六郷山長岩屋住僧置文案」から、豊後高田市長岩屋地区は、谷全体に長岩屋（現天念寺）に属する坊が分布し、谷の居住者はすべて「住僧」であるという論理をもって、長岩屋が在地を支配した。

以上のような飯沼氏の研究は、中野氏も重視された奈良時代末から平安時代の六郷山の歴史について、古文書や金石文といっ

た同時代史料をもとに明らかにされたものであった。確かに、中野・飯沼両氏の研究は、六郷山の成立は宇佐宮や弥勒寺の影響の下に展開したという点では共通しているものの、飯沼氏の研究は縁起類や後世の記録類に拠った中野氏の研究を克服したものと位置付けられよう。また、⑨のように長岩屋の支配のあり方を明らかにされたことは、六郷山と在地社会という視点を新たに提示したものであり、これらの氏の研究は六郷山の歴史を単に六郷山という集団の動向を追究するのみで展開し、各時代の政治や文化の動向とリンクさせる視点あるいは地域社会とのつながりといった視点のなかった従来の研究とは一線を画したものともいえる。現段階では、古代・中世六郷山の歴史については基本的に右で見た飯沼氏の見解に尽きるといえよう。なお、ここで留意される点は、飯沼氏が④・⑤にある通り、六郷山の成立・展開に関連して「天台僧」に着目されたことである。六郷山の展開は、宇佐宮や弥勒寺だけでなく天台僧も関与したとする視点は、六郷山の歴史において比叡山の存在にも着目された、河野清實氏の「二つの見方」を発展させたものとも位置付けられる。

ところで、上で述べた飯沼氏の宇佐宮と天台との関わり、そして、これは経塚造営をもたらし、宇佐宮と密接な関係にあった国東半島にも経塚が営まれたとする論の形成は、一九九二年に開催された歴民の『弥勒憧憬』展も一つの契機であった。さらに、この経塚と六郷山の問題については、『弥勒憧憬』展で「大分県の経塚」を執筆され、当時六郷山調査を担当された栗田勝弘氏が考古学の立場から一九九七年に論文を発表されている。[19]

栗田氏はまず六郷山寺院の伽藍配置を山の斜面に堂舎が階段状に縦に伸び、奥の院を有するものを「縦伽藍」、谷沿いに横一列に堂舎が配置される「横伽藍」と分類され、一二世紀段階からの六郷山寺院のうち、「縦伽藍」のものには経塚が伴うことに注目された。また、氏は寺院の実査から、「〜石（岩）屋」（一二世紀段階から六郷山であったもの）という名称の寺院には奥の院とされる洞窟や岩陰が所在し、こうした場所を起点に伽藍が整備されたと論じられた。かかる寺院の成立は、古代的な里の寺院から中世的な山の寺院への展開と位置付けられ、現存する様々な遺物から一〇世紀頃に寺院の成立を求められ、一二世紀前半に経塚造営を伴い、伽藍が整備展開したと述べられた。この栗田氏の論は、六郷山寺院の伽藍配置と経塚との関

わりを取り上げ、経塚造営を伽藍整備の画期と見なされたことが特徴である。かかる栗田氏の研究は、一二世紀段階から六郷山とされた寺院の性格を考える上で重要なものと思われる。

また、新たな六郷山像を提示された飯沼氏の研究をうけて、六郷山と弥勒寺僧との関係については、西別府元日氏が天長七年（八三〇）の「大政官符」に注目され、弥勒寺講師である光恵が弥勒寺僧の修行の地として示した「神山」が、豊後高田市域の山、すなわち六郷山を指すものと推察されている。[20] また、鎌倉時代の六郷山の関東祈祷所化をめぐっては、井上聡氏が宇佐宮内部でも相対立する二つの勢力が所在したことを述べられ、飯沼氏が指摘された九条家と近衛家という対立だけでなく、宇佐宮内にも六郷山自立をもたらす動きがあったことを明らかにされた。[21] あるいは、筆者自身も六郷山領に特有の「払」という土地の編成単位の史料上の初見が、六郷山の関東祈祷所化と前後する一三世紀前半であることから、この時期に四至をもって表現されるような領域の確定が行われたと見なされることを述べた。[22]

すなわち、現在に至るこの時期は、飯沼氏による新たな六郷山像の提示とともに、これをうけて六郷山の歴史について多様な視点から研究が行われ、個別の歴史事象についても研究が深化した時期といえる。しかし、中野氏が指摘された論点のうち、例えば「安貞目録」に見られる法会とその背景にある信仰のあり方については、段上達雄氏が屋山を中心に検討を加えられているものの、[23] なお充分に検討されていないし、六所権現や仁聞の検討も課題としてある。

そこで、これらの諸点をはじめ、なお残された六郷山研究の諸課題については、節を変えてまとめてみたいと思う。

二　六郷山研究の諸課題

これまで、いくつかの課題を挙げてきたが、ここで改めて六郷山研究の課題をまとめてみると、次のようになる。

まず、一点目としては、六郷山という寺院集団のプロフィールを明らかにすることである。つまり、六郷山という集団については、前述したようないくつかの目録によって、これを構成する寺院の変遷を知ることができ、そこでは「安貞目録」→

「建武注文」→「仁安目録」というように、時代が新しくなるにつれて、六郷山とされる寺院が増加している。従来、これは六郷山の拡大として表現され、その要因について飯沼氏は宇佐宮や弥勒寺領荘園に所在した寺院が宇佐宮勢力の後退によって、地頭勢力に寺領も奪われたことをうけて、六郷山に加わり地頭らに対抗したのではないかと推測されている。この飯沼氏の見解をふまえて、六郷山の拡大の要因はなお検討されるべきであろうし、六郷山の拡大として表現される現象の前提には六郷山に編入されていない寺院が所在しており、それらがいかなる性格の寺院であるのか検討することも重要であろう。いわば、六郷山という集団に属する寺院について、いかなるタイプの寺院が所在するのかを「腑分け」していることが求められる。

そして、この問題に関連して、二点目の課題としては、中世後半以後の六郷山の歴史の解明である。まず、中世後半の六郷山については、飯沼氏の見解の⑨にあるように、室町時代になると、吉弘氏が六郷山執行職を有し、武士による支配が展開したとされている。しかし、今後はこうした基本的な流れに加えて、具体的に六郷山の動向等を追究していくことが必要であろう。既に、海老澤衷氏は応永一九年(一四一二)の「六郷満山離山衆徒等申状」(『太宰管内志』所収)を取り上げられ、この史料は守護段銭の賦課という状況に関わって提出されたものであり、ここに武士による支配の展開に伴う「六郷山の衰退」を具体的に見い出されている。[24] この海老澤氏の研究に見られるように、今後はさらに「六郷山の衰退」の在り方を能う限り具体的に追究することが求められよう。また、中世後半の六郷山に関しては、仁聞入滅の地とされる千燈寺の存在も注目される。長岩屋の支配のあり方を示す「六郷山長岩屋住僧置文案」[25]は、「此本書千燈寺中ノ坊執行屋敷ニ有」という裏書を持ち、ここから、長岩屋の支配に関わる文書が千燈寺、それも「執行屋敷」に所在したことがわかる。これは飯沼氏も指摘されているように、六郷山執行が千燈寺に在したことを窺わせてくれる。[26] すると、中世六郷山の組織・体制に関しては、これまで「惣山屋山」が中核寺院として注目されてきたが、少なくとも中世後半の六郷山においては、執行職が在した寺院も「惣山屋山」のみと限定されるものでなく、屋山の他に核となる寺院も所在したことが考えられ、千燈寺はその一つであったと想定できる。仁聞入滅の地とされる千燈寺の位置付けについては、今後多様な側面から追及されるべきであろう。[27]

一方で、近世の六郷山については、中野氏による「峯入り」の再興に関わる研究以外、正面から取り上げた研究はほとんどない。近世仏教や寺院に関する研究が、中世のそれに比してあまり活発でないという状況は、六郷山に限ったことではなく、近世仏教史研究全体の傾向ともいえる。竹田聴洲氏は、近世の仏教については「幕藩権力による完全な統制と過保護を受け、そのためいたずらに安逸・徒食を貪り、虚脱と形骸化のうちに俗化して、古代・中世にみられたような活力と精彩を失い」、結果「退廃と堕落の一途をたどったという歴史像がほぼ通説として定置されている」と述べ、こうした歴史像は「近世と前代との歴史的社会的条件の相違を無視して、およそ宗教とはかくあるべきものという先取りされた一定の理想型に照らして、近世仏教は価値の低いものという一種の先入観に支配された傾きなしとしない。」と指摘され、近世社会と仏教とのつながりを解明していくことを述べられた[28]。この竹田氏の指摘された近世仏教研究の在り方は、六郷山研究にもあてはまるものであり、磨崖仏や国東半島独特の「国東塔」など、半島独自の仏教文化を生み出した古代から中世は、まさに六郷山が「活力と精彩」をはなった時代として様々な研究が行われきた。ただ、ここで改めて留意すべきことは、六郷山寺院が現在まで存続してきたことの意義を問うべきことであろう。廃寺となったものもあるが、独特の仏教文化を開花させたと言われる六郷山寺院がいまも所在し、様々な文化財を伝えることを可能にした条件を解明することは重要である。今後の研究においては、古代や中世のみならず、近世あるいは近代の六郷山を取り上げていくことが求められる。

そして、三点目としては、六郷山を構成する寺院、あるいは六郷山自体の内部構造はいかなるものであったのかを明らかにすることが挙げられる。従来の六郷山研究では、飯沼氏が平安時代から鎌倉時代にかけて、六郷山全体の衆議の在り方も「大衆による合議制からタテ支配の体制」へと変化したことを指摘され、また六郷山の支配体制における別当・執行・権別当の位置付けを試みられた他は、いわばこの寺院のソフト面についての追究はほとんどなされていない。例えば、各寺院の僧侶集団はいかなる組織原理と規律のもとに所在したのか、修学・儀礼の実態、あるいは寺院を構成する僧侶や俗人の身分構造がいかなるものであるのか等は追究されねばならない。六郷山の場合、前述したように個別寺院に関するまとまった史料としては、

余瀬文書のみといえる状況であり、かかる課題は各寺院すべてで解明しうるものではないし、余瀬文書によって夷岩屋の内部構造の全体像を把握できるものではないが、能う限り検討する必要があるだろう。

四点目としては、仁聞研究および六郷山の縁起についての研究が挙げられる。仁聞については、河野清實氏が人聞という記載から仁聞に変化するのは一六世紀のこととされたが、その後の仁聞研究は既述した通り、中野氏が具体的に言及されているのみである。仁聞が実在の人物ではないことは明らかであり、かつて河野氏が示された「人聞から仁聞」への変化がいかなる要因に拠るのか、これに関連して仁聞による六郷山の開基伝承（以下、仁聞伝承という）の創出と展開が検討されねばならないであろう。この仁聞伝承は『託宣集』にも記載されているが、この他に六郷山に関する縁起としては、『六郷山年代記』に記載されている千燈寺に関わる縁起（以下、千燈寺縁起と呼ぶ）がある。近世になると、これらの縁起をもとに、宝暦二年（一七五二）に「六郷満山開山仁聞大菩薩本記」が作成されるわけであるが、千燈寺縁起は少なくとも中世後半には成立しており、『託宣集』等に記されたいわゆる仁聞伝承とともに、これら諸種の縁起が、近世になってどのように整備されたかを検討することも重要であろう。

五点目としては、在地社会と六郷山の寺院とのつながりを追究することが挙げられる。前述したように、中世六郷山については、前掲の飯沼氏の見解の⑨のように、解明の手が加えられているが、かかる視点は近世の六郷山研究においても保持されねばならない。近世寺院とムラとの関係は、双務的な関係にあったと見られる。例えば、住職の交替にあたっては、寺院単独で決定するのではなく、檀家の承認を必要としたことはその一例であろう。[29] あるいは、近世寺院はムラにおいて、相論の調停など「公共的役割」を有したことも最近明らかにされてきており、[30] こうした近世寺院とムラとの関係を様々な面からの追求が想定される。ただし、この点については六郷山の各寺院に残された史料では限界があり、ムラに残された史料を活用することも不可欠となるだろうし、文献だけでなく祭礼などにも目を向けることが必要となる。

六点目としては、六郷山の信仰の在り方の追及がある。これについては、前述したように中野氏や段上氏らによる法会の研

究もあるが、六郷山の各寺院等に現在も所在する仏像をめぐって、これを製作するに至った諸信仰の具体的な展開過程を検討していくことも必要であろう。また、余瀬文書には南北朝時代に彦山修験の流入を示す文書[31]が残されている。修験の問題は中野氏の研究でも取り上げられているが、山岳信仰と修験道の連続面・非連続面が不明確なままであることも指摘されている[32]し、修験道とはいかなるものであるのかはなお検討される課題であり、六郷山を「山岳修験の地」とする理解自体も、再検討されるべき問題[33]といえる。

なお、付言するならば、六郷山は一二世紀に天台末となったが、同時期には北陸白山も天台末となっている。六郷山の歴史を白山等のような他地域の天台末寺院の歴史と比較していくこと、あるいは発掘調査を含むさらなる遺構調査等もさらに実施していくことも必要となろう。

本稿では、これらの諸課題すべてを検討することはできず、以下では一点目に掲げた六郷山の系譜[34]について若干の検討を加えることとしたい。

三　六郷山の系譜

六郷山の歴史を検討していく上で、まず留意されることは、六郷山という山は実在する山ではないという点である。これは自明のことといえるかもしれないが、山岳信仰の地という時、我が国では、例えば彦山や北陸白山、吉野山等のように、実在の山を信仰の対象としている。しかし、六郷山の場合、その呼称は人為的に付されたものであり、国東半島にかような山は実在しない。国東半島はほぼ円形をなし、中央には両子山が聳え、そこから海に向かって放射状に谷が伸び、山間には切り立った岩山が点在している。国東半島における信仰の原初形態がいかなるものであるのかは直ちに知ることはできないが、こうした谷々に位置する岩山が信仰の対象となり、あるいは修行の場とされたと見られる。そして、こうした半島域の行場のうち、宇佐に近い地域を中心に宇佐宮との関係を有した地が、一二世紀になって六郷山として編成されたと考えられるのである。換

言するならば、平安時代の国東半島には六郷山に組織化されない行場も所在したのであり、このことは六郷山の一つとされる文殊仙寺がその開基を仁聞ではなく役小角としている点にも窺うことができる。なお、『託宣集』には、六郷山で修行した華厳が身を焼いたという話が記載されており、これは六郷山が山岳修行を本質とする地であることを物語っていよう。

六郷山は八幡神の応化である仁聞が修行した地とされ、おしなべて六郷山に属する寺院が開基を仁聞としている。このことは、各地に成立していた行場等を六郷山という集団として編成し、支配していくなかで、集団の正統性を明示するために、またその結合原理として開基仁聞という存在が創出されたと想定されるのである。ちなみに、「人聞菩薩朝記」は仁平二年(一一五二)のものといわれ、一二世紀半ばには仁聞伝承が所在したと推測されるが、かかる伝承が具体的にいつ頃創出されたのかはなお詳らかでない。

一二世紀段階に天台末となった六郷山は、時代が降るにつれて、そこに編成される寺院数が増加していく。六郷山のリストともいうべき目録類をみていくと、前述した小泊氏らの研究から「安貞目録」が最も古いものと位置付けられるが、例えば富貴寺あるいは最古の紀年銘を持つ国東塔の所在する岩戸寺、あるいは一一世紀の釈迦三尊像が残されている平等寺(国見町)は「安貞目録」にはなく、「建武注文」にはじめて登場する。これら富貴寺や平等寺などのように、実際に寺院を調査した時、「安貞目録」以前に遡る仏像や石造物などが所在する寺院が検出されるものの、「建武注文」以後にしか六郷山として把握されない寺院が所在するのである。

そこで、これら「建武注文」ではじめて登場する寺院について検討してみると、まず呼称の問題にいうならば、これらの寺院は「〜山」あるいは「〜岩屋」という呼称ではなく、基本的に「〜寺」と称されていることが一つの特徴として挙げられる。このことは、「安貞目録」に見える寺院が「建武注文」においては、基本的に「〜山」あるいは「〜岩屋」と称されたことと大きな違いがあり、「建武注文」ではじめて登場する寺院は、元来の六郷山ではなかったことを示しているだろう。

次に、こうした寺院の立地について見ていくと、例えば平等寺は国見町大字野田に所在するが、この野田が弥勒寺領伊美荘

の鎮守たる別宮八幡の氏子圏にあることは留意される。段上達雄氏が提示された、現在の氏子圏の相違は、中世の荘園あるいは開発主体の別につながるという見解[35]をふまえるならば、平等寺は伊美荘に所在した寺院ということになる。この平等寺以外にも「建武注文」では、荘園に立地した寺院を六郷山寺院として把握している事例を見つけることができる。例えば、妙覚寺は豊後高田市払田に所在したといわれるが、ここは弥勒寺領都甲荘に含まれる地である。あるいは、富貴寺についても、同寺はもともと宇佐宮大宮司の祈願寺とされた寺院であり、宇佐宮領糸永名のうちにある。いわば、これらは宇佐宮や弥勒寺の荘園に立地するもので、「荘園の寺」とも呼ぶべき存在である。

一方で、「建武注文」にはじめて登場する寺院としては、この他に「山の寺」[36]とも呼ぶべき山間の寺院がある。例えば、岩戸寺や文殊仙寺あるいは虚空蔵寺(現在の東国東郡国東町)等がこれにあたる。これらの寺院をあえて「山の寺」と呼んだのは、現在の氏子圏等を見ても荘園内に位置するものではないが、「安貞目録」以前の信仰遺物を伝える寺院もあるものの「安貞目録」には見られず、「〜寺」と称される寺院を示すためである。

ただ、ここで留意されることは、岩戸寺にしろ成仏寺にしても、「山の寺」のなかでも、いわば有力寺院と見なされるものは、国東半島のなかで唯一の国衙領であった国東郷に隣接する地にあることである。確かに、国東郷に隣接する寺院でも大嶽山(現神宮寺)などは「安貞目録」段階で六郷山とされており、この両者の差異を細かく追究していくことは史料的にも難しいが、ここで重要なことは「安貞目録」に記載されない山間の寺院が所在するということである。特に、国衙領国東郷が所在した国東半島の北東部、すなわち宇佐から見た時遠距離に位置する地などでは、山岳修行の場として平安時代から所在したとしても、直ちにそれらがすべて六郷山として組織化されたわけではなかったのである。

ここで改めて小泊氏の研究を引用するならば、平安時代の古文書などの一次史料では六郷山とされた寺院は「〜山」あるいは「〜岩屋」という呼称であったという指摘は重要である。一二世紀段階で天台末となり、六郷山として組織化された寺院は、一部は智恩寺のように古代寺院の系譜をひくものもあるが、かかる呼称が端的に示すように本源的には山岳修行の場であった

ことを知ることができる。その中心となった地域は、宇佐に近い国東半島の西から南西部であったと見られ、これは当初の六郷山が宇佐宮と密接な関係を有しつつ成立したことに基づくものといえる。そして、六郷山は一三世紀になって、関東祈祷所として宇佐宮から自立した形をとることになり、国東半島における一個の在地勢力として、国東半島に点在した山岳修行の場あるいは荘園内に位置した寺院を組織化したと想定されるのである。「建武注文」はこうした六郷山の動向を表現した史料であり、かかる中世の六郷山の歴史をふまえた上で成立するのが「仁安目録」であると位置付けられよう。

これまで見てきたように、六郷山が一二世紀段階から国東半島全体をカバーした寺院集団でないと想定されることは、一二世紀から一三世紀段階の国東半島の仏教史を宇佐宮の影響下で成立した六郷山の歴史で説明するだけではなく、より多面的ー特に東国東については、例えば瀬戸内海を通した中央との関連ーに検討していくことを提起しているであろう。また、そこでは国東半島をまるごと一つの地域として見なすのみならず、西国東と東国東といった様々な地域設定を行い検討を加えていくことが求められるように思われるのである。

それでは、何故に「荘園の寺」や「山の寺」が、六郷山として把握されるに至ったのだろうか。この課題については、充分に検討されるべきものであるが、ひとまずここでは「荘園の寺」および「山の寺」の性格を含めて簡単に触れておきたい。

まず、「荘園の寺」について見ていくと、平安時代の宇佐宮あるいは弥勒寺は、延暦寺と関係を有し、天台化していたことが指摘されている。すると、その荘園にも天台が流入していたと見られ、一三世紀半ばから一四世紀半ばに六郷山とされた寺院の数が増えていることは、同じ天台寺院であった「荘園の寺」を六郷山として把握したことが想定できる。これら「荘園の寺」の六郷山化に関しては、前でも触れた飯沼氏の指摘にあるように、鎌倉時代の宇佐宮による荘園支配の後退がその要因としてまず挙げられよう。ただ、例えば富貴寺は六郷山として把握されるに至るが、同寺が所在する糸永の谷全体が六郷山領とされたわけではないし、同じく六郷山とされた妙覚寺のある都甲荘も六郷山領とはなっていない。つまり、ここでは寺のみが六郷山の支配下に置かれたのである。

一方で、「山の寺」に関しては、六郷山とは山岳修行の場であるという点で共通している。ただこの点をもって、「山の寺」の六郷山化の要因すべてと見なすことはできず、これはあくまで六郷山化の一要素といえる。しかし、「山の寺」は寺とともに一定の領域が「六郷山領」とされており、この点が「荘園の寺」と異なる点である。すると、六郷山の拡大は、荘園支配の後退という点のみでは説明できないわけで、さらなる要因が検討されねばならない。そこで留意されるのが、安貞二年の関東祈祷所化である。拙稿でも指摘したように、この関東祈祷所化に伴って、国東半島においては宇佐宮や弥勒寺領荘園と六郷山領との領域が明確にされたと見られる。[37] そして、かかる六郷山領の設定に関連して、所領の拡大を企図して、従来は六郷山あるいは荘園公領に属さなかった「山の寺」も組み込み、結果「建武注文」のような六郷山の姿が創出されたと考えられる。これらの点はあくまで仮説に過ぎないものであるが、いずれにしても、六郷山の拡大とも表現される現象は、六郷山が関東祈祷所となったことが大きな画期であったと見られ、鎌倉時代の六郷山の多方面からの検討が、今後求められる。

以上では、六郷山の系譜と題して、六郷山に属する寺院は、歴史的に見た時、すべて単一の類型にあてはまるものではなく、様々なタイプの寺院が含まれることを述べてきた。このような点をふまえ、「仁安目録」で六郷山とされる寺院を分類すると、次の様になる。

A　古代寺院の系譜をひくもの。

B　一二世紀の六郷山成立の段階から、六郷山寺院として編成されたもの。

C　宇佐宮や弥勒寺の荘園内に位置し、鎌倉時代になって六郷山に組み込まれたもので、「荘園の寺」とも呼ぶべきもの。

D　山間に立地し、「荘園の寺」ではないが、鎌倉時代になって六郷山となったもの。「山の寺」とされるもの。

E　「仁安目録」ではじめて六郷山として登場するもの。

また、「仁安目録」で六郷山とされた寺院について、これまでの「六郷山調査」の成果をもとに、現況から分類すると、次

のようになる。

Ⅰ　現在も法灯を継ぐもの

　a天台宗のままであるもの

　b他宗に転宗したもの

Ⅱ　無住となっているもの。ここには、いわゆるお堂として存続するものも含む。

Ⅲ　建物もなく、遺跡のみが残るもの。

Ⅳ　所在地自体も不明なもの。

そして、これら二つの分類を組み合わせることで、六郷山寺院の歴史性を一定程度知ることができるものと考える。なお、六郷山寺院の分類は、前述した後藤宗俊氏や栗田勝弘氏が提示されたように、六郷山の立地によって行うことも可能であるが、ここでは歴史的条件をふまえたものとした。

おわりに

これまで、甚だ雑駁ながら、従来の六郷山研究と残された課題についてまとめてきた。ただし、「はじめに」でも断ったように、本稿は歴史学の立場から述べたものであり、それゆえに取り上げられなかった研究・課題もあり、この点についてはご容赦いただきたい。

ところで、六郷山の所在する国東半島は、「仏の里くにさき」といわれ、「伝統文化」が残る地として語られるむきがある。しかし、現実には六郷山寺院の所在するムラは、過疎によって人口が減少し続けている。将来、六郷山の寺々がどのようになるのか。国東半島におけるムラの崩壊という現実と向き合った時、そこでは例えば後藤氏が広域遺跡として六郷山を捉えられ

たように、国東半島の文化を育んだ六郷山寺院の保存ということも考えられるべきであろう。そのためには、六郷山の歴史を解明することは不可避の大きな課題であり、それも多方面から多様に研究されることが求められる。

本稿は、そうした六郷山研究を進めていく上で、前提となる基礎作業の一つであり、不充分なものではあるが、ここで示した論点については、皆様のご批正を賜りたいと思う。

註

（1）ここでいう「史料」とは文字資料を指す。

（2）『寺社縁起』（日本思想大系　岩波書店　一九七二年）所収。

（3）この他に六郷山のリストとも呼ぶべき史料は、弘安七年（一二八四）の「六郷山異国降伏祈禱巻数目録写」や嘉元二年（一三〇四）の「六郷屋山例講谷役配分注文」などがあるが、ここではより六郷山の全体を知ることのできる三つの史料に分析対象を絞ることとした。また、これら三点の目録類は渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』（別府大学、以下、『史料集成』と略する）の国東半島域を対象とした一から四（上）に翻刻収載されている。

（4）『史料集成』第二巻「香々地荘」の項に収載されている。

（5）『研究紀要　Ⅵ』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九八九年）に飯沼賢司氏が紹介されている。

（6）一九三五年に合本が刊行され、一九七三年に再版されている。

（7）『八幡信仰史の研究』第五章。なお、中野氏のこの著書は、一九七二年に増補版が公刊されている。

（8）久米邦武による古文書採訪、天沼俊一による石造物調査、そして新納忠之助による仏像調査などの諸調査である。もちろん、これらは悉皆的な調査ではないが、半島に所在する文化財調査の先鞭をなすものといえ、主だった文化財の所在確認と「資料化」が行われた点で重要な調査であった。

（9）その成果は、和歌森太郎編『くにさき』（吉川弘文館　一九六〇年）に結実している。

（10）『六郷満山関係総合文化財調査概要1～3』（大分県教育委員会　一九七六、七七、八二年）や『国東仏教民俗文化財緊急調査報告書』（元興寺文化財研究所　一九八一年）に結実する調査がなされた。また、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館も宇佐・国東地域の寺院調査を行い、六郷山の寺院も調査対象となった。この調査をまとめたものとして、『宇佐・国東の寺院と文化財』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九〇年）が公刊されている。

（11）『豊後国都甲荘　1』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九八八年）。なお、『豊後国都甲荘の調査　資料編』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九二年）に本文部分は再録されている。

（12）新川登亀夫「『豊後国六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』について」（『六郷満山関係総合文化財調査概要3』　大分県教育委員会　一九八二年）。

（13）海老澤衷「富貴寺の歴史」（『富貴寺』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九八四年、のち同氏著『荘園公領制と中世村落』校倉書房　二〇〇〇年に再収）。

（14）後藤宗俊「遺跡としての六郷満山の存在形態」（昭和五六年度文化庁広域遺跡保存対策調査委員会発表、のちに同氏著『東九州歴史考古学論考』山口書店　一九九一年に再収）。

（15）小泊立矢「旧仏教の動き」（『大分県史　中世篇Ⅰ』第六章　大分県　一九八二年）。

（16）『智恩寺』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九二年）。

（17）現在、この調査の報告書は『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ～Ⅷ』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館のち大分県立歴史博物館一九九三～二〇〇〇年）。が公刊されている。

（18）「文書から見た六郷山の様相」（『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九三年）、「都甲地域の環境と歴史　古代・中世」および「中世の耕地と集落」（いずれも『豊後国都甲荘の調査　本編』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗

資料館　一九九三年)、「神と仏と鬼の里を行く」(『くにさきの世界』豊後高田市史特論編　一九九六年)、「古代の衰退と中世の台頭」および「鎌倉幕府と国東」(いずれも『豊後高田市史』　豊後高田市　一九九八年)など。

(19) 栗田勝弘「国東六郷山寺院の伽藍配置と経塚」(『古代文化談叢』第三七集　一九九七年)。

(20) 西別府元日「躍動する古代の豊後高田」(『豊後高田市史』　豊後高田市　一九九八年)。

(21) 井上　聡「豊後国六郷満山の関東祈祷寺化をめぐって」(『研究紀要　1』大分県立歴史博物館　二〇〇〇年)。

(22) 拙稿「中世の耕地と集落」(『豊後国香々地荘の調査　本編』大分県立歴史博物館　一九九九年)。

(23) 段上達雄「六郷山寺院の年中行事と信仰」(『豊後国都甲荘の調査　本編』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九三年)。

(24) 海老澤衷「室町幕府と国東」(『豊後高田市史』　豊後高田市　一九九八年)。

(25) 『豊後国都甲荘の調査　資料編』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九二年)に収載されている。

(26) 飯沼賢司「都甲地域の環境と歴史　古代・中世」(『豊後国都甲荘の調査　本編』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九三年)。

(27) 中近世移行期の六郷山においては、廃絶したもの、あるいは一度廃絶しながらも近世に再興されたと伝える寺院もある。ここで注目したいのは後者の寺院であり、そうした再興がどういった者によって行われたかである。例えば、「六郷山調査」で取り上げられた報恩寺(現東国東郡武蔵町)や岩脇寺(現豊後高田市)は、近世前半の住職墓地がその所在する地の有力者の墓地と混在しており、これは寺院と有力者が密接に結び付いていたこと―例えば中興した僧が有力者の家の出身など―を示すものといえよう。このように中近世移行期の六郷山については、「連続と断絶」という視点から、政治面また寺院の消長などについて、文献をはじめ諸資料をもとに検討を加える必要がある。この墓地形態に関しては、『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九六年)および原田昭一「豊後国における「配石墓」終焉の一様相」(『研究紀要　X』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九七年)を参照。

(28) 竹田聴洲「近世社会と仏教」(『岩波講座　日本歴史』近世1　岩波書店　一九七五年)。

(29) 拙稿「護聖寺蔵文献資料の調査」(『六郷山寺院遺構確認調査報告書　V』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九九六年)。

(30) 斎藤悦正「近世社会の「公」と寺院」(『歴史評論』五八七　一九九九年)。

(31) 正平一二年(一三五七)付の「彦山山務下文」(『史料集成』二　香々地荘八二号)等。

(32) 長谷川賢二「修験道史のみかた・考えかた」(『歴史科学』一二三　一九九一年)。

(33) かかる問題については、段上達雄氏の御教示に拠る。

(34) こうした六郷山の系譜に関しては、筆者も別に触れたことがある(「六郷山研究をめぐる一・二の論点」『六郷山寺院遺構確認調査報告書　Ⅷ』大分県立歴史博物館　二〇〇〇年)。本節はこれをまとめ直したものである。

(35) 段上達雄「村落と信仰」(『豊後国田染荘の調査　Ⅰ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　一九八六年)、同氏「村落構造と信仰」(『大分県地方史』一〇七　一九八二年)。

(36) 「山の寺」という言葉については、前掲註(15)の後藤氏の論考では、六郷山寺院をその立地面から分類し、山の中腹のものを「山の寺」、谷沿いのものを「谷の寺」と呼ばれている。ここにいう「山の寺」は、この後藤氏の語句とは意味の異なるものである。

(37) 前掲註(22)論文。